

### 3. ヤモリかな？イモリかな？ ～4、5歳児の交流～

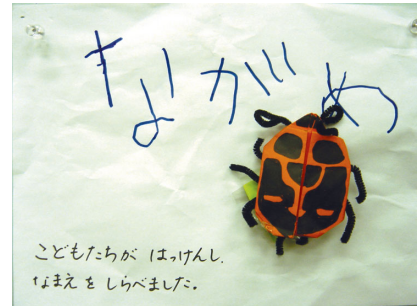
港区立港南幼稚園(東京都港区)

[4、5歳児]

生き物と植物のいろいろな関係をとらえた環境作りを図り、虫に出会うことの少ない生活をしている都会育ちの子どもたちが、自然に親しむ中で生き物とのかかわりを深められるようにした。

#### 事例1 知らない虫との出会い ～見つけて調べた自分たちの虫「ナガメ君」 (5歳児)

畑のジャガイモを掘ったことで、奥にいた虫を発見する。テントウムシを幼虫から育ててきた幼児たちが「テントウムシじゃない！」と、よく似ているけれど大きさや形が違うことを発見する。保育者が「なんて言う名前なんだろう…」と問いかけてから数日たったある日「ニュース！ニュース！ほら！これだよ」「見付けたよ」と幼児数名が図鑑を持ってきた。知らない虫を自分たちで調べて見付け出したのである。そして、「カメムシの中のナガメって言うんだよ」と得意そうに発見したことを話した。分からなかったことが、分かった時の喜びを大いに感じたと思われる。それから毎日、ナガメに関すること、見ていて知った様子など、友達同士で知らせ合った。虫が怖かったA児は、みんなが親しんでいる様子を見て、思わず手の上ののせてもらった。「軽い…」「怖くない感じ」と触れたことを喜んだ。幼児たちは、この虫を「ナガメ君」と呼ぶようになり、みんなの虫としてかわいがっている。A児は、これらのことをきっかけとして、虫とり仲間に加わったり、虫に思いを寄せるような言葉を掛けたりして積極的に行動するようになった。また他の遊びや活動にも意欲的に取り組むようになった。



みんなにナガメのこと知らせよう！

#### キーワード

発見、好奇心、知的好奇心の芽生え、試行錯誤、直接かかわる、生命の大事さに気付く、感動する心、感動の共有、夢中

このような体験を積み重ねることで、生き物とのかかわり方を学び、モデルになる5歳児の姿に4歳児は魅力を感じるようになりました。そして、生き物への興味や5歳児への親しみから、かかわりも活発になっていきました。

#### 事例2 知る楽しさの獲得 ～「年長さんに聞いてみよう」

4歳児は、ダンゴムシや幼虫を探す5歳児の姿に刺激を受けたり、学年で自然にかかわる体験をしたりしたことで、カタツムリに興味をもち自分たちで見付けてきた。プラスチックの空き容器に入れておくことで満足し、数日後にはカタツムリがカラカラに乾いてしまった。保育者が「カラカラになってしまったけど、どうしようか」と問うと以前読んだ絵本を思い出して「水を掛けるといいんじゃない」と考え、水を掛けると動き出し、とても喜んだ。そこで飼育ケースがあることや、5歳児が昨年からのカタツムリを飼っていることを知らせると、5歳児に飼い方を教えてもらいに行く。聞かれた5歳児が「土を入れるんだよ。あとはキャベツとか人参とか食べるから入れてあげるんだ」と話しながら、土を入れたり、草を入れたりと一緒に行動しながら飼い方を教えてくれた。



カタツムリのお家を作ろう

#### キーワード

直接かかわる、素直に感じる、発見、生命の大事さに気付く

#### 事例3 予想して、確かめていく ～ヤモリかな？イモリかな？

保育室でままごとをしていた4歳児の女児たちがヤモリを見つけ、「先生、トカゲみたいのがいる！」「捕まえて！」とやってくる。

その言葉を聞いて他の幼児たちも集まってきた。男児数人が捕まえようとするが、なかなか捕まえられないので、保育者が捕まえ、空き容器に入れた。その際しっぽが切れてしまった。保育者が「あっ、しっぽが切れた！」と言うと、「しっぽは切れても、また生えてくるから大丈夫だよ」と男児の一人が言ったので、皆は安心する。チョロチョロ動くしっぽが不思議でみんなはしばらく見ていた。

保育者が「これトカゲじゃないよ、ヤモリかな？イモリかな？」「先生もどっちが分からないよ」と言うともみんな困ってしまった。保育者が再び「じゃ、年長さんに聞いてみる？」と言うと、男児が「そうだ、年長さんはよく知ってい

るもんね」「聞きに行こう」と、カップに入ったヤモリを持って、5歳児の所へ聞きに行った。4歳児の問いに対して5歳児は、まず図鑑で調べようとするが、明確には分からない。数冊調べて『水のいきもの』（岩崎書店）の中にイモリを見つける。イモリの体の特徴を見比べて「模様は無いな」とつぶやく。友達と考えを出し合った後、「そうだ！分かった、水だ!!」と、空き容器の中に水と生き物を入れ、みんなで様子を見てからすぐに取り出した。「水に弱いからイモリじゃなく、ヤモリだ!」という考えで一致し、土と枯れ葉を飼育ケースに入れ、4歳児の所に持って行った。

図鑑を見てイモリが水の中に住んでいることが分かり、自分たちで生き物を試しに泳がせてみて、泳げなかった様子からヤモリであると判断した。今回初めて図鑑や絵本で調べても分からない場面に出会い、さらに予想して試し、確かめていくことにつながった。



ヤモリかな？イモリかな？

キーワード

発見、直接かかわる、素直に感じる、試行錯誤、共に考え、思いを表し合う、知的好奇心の芽生え、自分を表現する

事例4 カブトムシの成虫 ～5歳児から4歳児へ教え、伝えていくこと



「角が出てきた!」

昨年度の5歳児が育てていたカブトムシの幼虫の世話を託されて数ヶ月。見事な角のカブトムシが数匹生まれた。自分たちの世話で生まれたカブトムシは、とても愛おしく大事にしている。「カブトムシって後ろの足が長いだね」「背中がツルツルしてる」「土に潜っちゃった」等、間近に見たり、触ったりしてカブトムシとかかわり、新しい仲間を迎えるように接し、楽しんで世話をしていた。そして「小さい組さんはカブトムシ見てないよね」と気が付き、「貸してあげよう!」と4歳児の保育室に持って行った。「角を持つんだよ」「こうやって持つんだよ」「持てたね!」とカブトムシの持ち方を教えてあげた。4歳児はほめられたり、励まされたりしながら、恐る恐る掴み「持てた!」と喜び合った。入園当初は虫が怖かったC児も、友達がカブトムシを持って楽しむ様子を見て触ることができた。4歳児にとって、5歳児が虫とかかわる姿をいつも目にしている事や、見つけた虫を見せてくれる等のかかわりが、よい刺激になっていた。モデルとなる5歳児の姿があり、5歳児から4歳児へ教え伝えていくことが大事に受け継がれている。



「角を持つんだよ」

キーワード

発見、直接かかわる、素直に感じる、好奇心、感動する心、感動の共有、思いやる気持ち、共に考え、思いを表し合う

考察

共に生活し日々を重ねていく者として、幼児、保育者、保護者、が経験したことを一緒に喜び、楽しみ、共感し合うかかわりの中で、幼児の心がより豊かになる。幼児の目線で大人たちも自然に目を向け、自然に対する不思議さ、美しさに心が動き、思いや感動を共有することで「科学する心」が育まれていくと思われる。また、考えたことを試行錯誤しながら確かめていく過程や発見の喜びも「科学する心」の育ちにつながっていると考える。

ポイント

子ども同士の日常の自然なかかわりの中に、「知りたい」「教えて欲しい」「同じようにやってみたい」「伝えたい」という思いが表れています。保育者はその姿を支え理解することで、「科学する心」の育ちにつながる体験を捉えています。生き物とのかかわり方を学ぶ5歳児の姿に4歳児が魅力を感じ、年齢を超えてかかわることのできる共有の場があること、また、そのような姿を活かしていく保育者の援助やかかわりを促す工夫が大切であることが分かります。